

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

現在、世界的に幼児教育の質の向上を目指した研究が行われている。幼児教育の質に関して多角的に議論されており、内外の研究者たちは保育実践の質が最も重要であることでは意見の一致をみている。しかし、教育方法学的な理論的研究、小学校教師を対象にした研究、心理学的な測定尺度を用いた研究がほとんどであり、質の高い保育と見なされる保育実践における保育者の思考の営みから、実践の質にアプローチした研究はほとんどない。本論文は、Schön の提唱する「行為の中の省察」に着目し、新任からミドルリーダーの時期の保育者による保育の営みを質的に分析しようとしたところに学術的な意義がある。同時に保育者養成と研修を展開する上からも教育的意義を有する。さらに、保育の営みにおける思考のプロセスが、フレームを通じた状況理解、そのフレームによっては予測できない事態が生じた際の「行為の中の省察」、そしてフレームの捉え直しという順で生じることを仮定し、それを独自の方法論によって検証しようとした点に学術的な独創性がある。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

OECD による保育の質に関する議論、幼児教育の重要性に関する教育経済学からの提言、及びわが国における幼児教育行政の動向を踏まえ、Schön による理論的考察と多くの保育学研究を展望した上で、保育実践における「行為の中の省察」が保育の質の中核であると論旨を展開するプロセスが丁寧に述べられている。そして、経験の異なる保育者を対象にした半構造化面接を行い、そこでの語りを質的に分析することで、理論的考察の妥当性を確認し、保育実践と保育者の資質向上について新たな仮説を導き出している。この一連の流れは学術的に妥当であり、保育実践と保育者養成・研修の進め方に有益なエビデンスを提供していると思なすことができる。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

観察法や質問紙調査法では、「行為の中の省察」という保育者の自発的で内的プロセスを捉えることはできない。本論文では、初任、中堅、ベテランの保育者に対して、半日単位の観察と保育の記録（撮影）を行い、保育終了後の面接において、保育実践者と映像を確認しながら保育を振り返ってもらい、半構造化面接により保育者の自発的な「行為の中の省察」を丁寧に引き出している。そして面接時の保育者の語りに対して GTA 等の質的分析を行い、「行為の中の省察」の理論を導き出している。実践後に保育の場での思考をリアルに捉えようとする方法はユニークであるといえる。同時に、この方法を用いた論文はメジャーな学術雑誌である「保育学研究」に2本採択されており、学術的な妥当性も確認されている。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

「行為の中の省察」の過程と内容をフレーム、つまり「実践場面の不確かな問題状況に意味を与え、問題を構成し、問題解決に向かわせるもの」との相互作用から具体的に描き出し、フレームの変容と複数のフレームの相互作用という概念を提出した点は独創的である。そして、保育実

践における「行為の中の省察」は、「支援に関する判断」、「支援の結果に関する評価」、そして、「再支援の必要性に関する判断と実行」の3つの段階を含む一連の過程であることが示された。フレームの形成と変容、フレームと「行為の中の省察」の相互作用についての考察は、保育者が養成段階から、初任・中堅・ベテランへと成長する際のキー・コンピテンシーになることを示唆しており、学術的に高い水準の考察と結論を示したといえる。さらに、保育者養成と研修の場において、「行為の中の省察」の質を向上させるための方法論について言及した内容は、本論文の教育的意義を証明している。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本論文は、実践のまさにその最中に保育者が状況と省察的に対話しながら行っている行為、認知、判断といった暗黙の〈わざ〉を意味する「行為の中の省察」を取りあげ、それを展開できる資質を身に付けることが保育実践の質を高めることになると提案した。「複雑で曖昧で不安定で多様である」保育実践について、理論的な考察を展開するだけでなく、経験の異なる保育者の実践とその語りを研究資料とし、それに学術的に妥当性と信頼性が確認されている方法を適用して質的に分析を行い、「行為の中の省察」の生じる状況とその内容、さらに省察が深まる過程を明らかにした。これらの点は、本論文を構成する複数の研究成果が学術雑誌に掲載されているように、学術的な意義は大きいといえる。また本申請者は研究成果の一部を国際会議（第18回環太平洋幼児教育学会2017）において発表を行い、保育者の「行為の中の省察」を半構造化面接で研究する可能性と意義を発信したことは特筆すべき事項である。

通常、「ベテランの技」の伝承は困難と思われているが、本論文はその技がフレームと「行為の中の省察」との相互作用にあることを具体的に示した。園内研修等で保育を語り合い、ベテランのフレームの働きとそこから生じる「行為の中の省察」を捉えることにより、若手であってもベテランの技を学ぶことができる可能性を示唆しており、本論文の教育的意義も示されたといえる。

以上の点を総合的に判断し、審査委員会は全員一致して、本論文が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）学位授与に十分に相応しい優れた研究であると評価した。